



御柱祭光の綺羅を降らす坂  
目処梃子のがつがつと突く御柱  
木落しを詠へ柱の怒張せり  
血流のくわつと落ちたる御柱  
御柱祭振り落されつ搔きつきつ  
御柱落ちて立ったる人けむり  
みしやぐちに抱かれ止まる御柱  
御柱祭神のふるまひ騒々し

たまきはる命晒せり御柱祭  
渾沌に会ひたる心地春の闇  
御柱祭中田英寿参戦す  
またがつて良いであらうか御柱

俳句俅々

小林貴子

俳人細川加賀は大正十三年生れ。昭和十五年に肺結核を発病し、療養中に石田波郷門で俳句を始める。十九年、石川県に疎開。二十二年の大火により、やっと建てた家が焼失（焼跡の雲雀の空となりけり）。二十六年に結婚。二十九年、ある会社をあてに上京するが、不況により就職できず。結局その会社は倒産してしまふ（職乞へり片蔭に妻待たせつ）。三十年、厚生省に未帰還調査部があり、二ヶ月限定でここに勤務（冬ばらや臨時職わが腰かがめ）。当時、日本全国中でも著名な料亭「灘万」は俳人の楠本健吉が経営しており、女将は健吉の叔母であった。波郷の斡旋により、加賀はここに

職を得る（四月馬鹿の女の中や勤めそむ）。帳場を担当する

（顔出せば秋風とほし金庫守）。三十一年に女将が逝去（喪服寒く泣きけり女五十人）。三十二年にはその職を辞する（逆吊りの寒夜の家鴨とも別れ）。厚生省臨時勤務だった時の知人の紹介で、運輸省に入省。欠員一名に応募者は八名。主席試験官が俳句を作る人で、虚子・誓子の句の解釈を聞かれ、これが幸いした（新任の顔風花にのぞかるる）。その後は五十九年に定年退職、俳誌「初蝶」を創刊主宰し、順風と思いきや、五年後、紅葉狩に吟行に出かけた先で転倒、頭部挫傷で逝去とはまことに奇禍といふべきか。人に歴史あり。波乱万丈の自句自註（俳人協会）はいたって興味深く読める。